

# 特集 他者と共同性

——戦後日本のスピリチュアリティ表象——

文責 柳瀬善治

## はじめに

本特集にまとめられた四本の論文は、二〇一七年一〇月一七日に行われた日本近代文学会二〇一七年秋季大会でのパネル発表「他者と共同性——戦後日本のスピリチュアリティ——」（於 愛知淑徳大学）をもとにしたものである。本パネルは三・一一以後の文化現象を研究している加島正浩の企画により成立している。その企画に福永武彦の文学を研究している木下幸太、津村記久子をはじめとする現代の日本文学とジェンダーの問題を研究している泉谷瞬がパネラーとして参加、そしてナシヨナリズムと三・一一以後の文学理論の問題を研究している柳瀬善治がコメンテーターとなつて行われた。

本特集は一九六〇年代以降のニューエイジや「スピリチュアリティ

イ」の形成を説く運動とそれに付随する文化現象、島菌進が言う「新霊性文化」を議論の前提としている（島菌『精神世界のゆくえ』二〇〇七）。「新霊性文化」には、欧米におけるキリスト教を前提とした霊性をもとしたものとは違う日本における独自の展開があり、それはリゼット・ゲールパルトが指摘するような一九八〇年代以降に生じるネオ・ナシヨナリズムの流れに合流したもの、ポストモダン思想の導入と軌を一にした「スピリチュアリティ」文化、とりわけオカルトや精神世界の興隆として表面化した（リゼット・ゲールパルト『現代日本のスピリチュアリティ』二〇一三）。これらは日本礼賛論やオウム真理教を優待する潮流を形成し、現在のスピリチュアル・ビジネスまで連結するものである。しかし、現在では、こうした負の側面だけではない「スピリチュアリティ」の可能性についても議論されている。堀江宗正が整理しているように、「スピリチュアリティ」を通して何らかの「他者性」に触れることで潜在的な自己を解

放し、理想的な自己の実現を目指すスピリチュアリティの運動はスピリチュアル・ケアなどに展開し、水脈を保っている（堀江宗正『歴史のなかの宗教心理学』二〇〇九）。

いわば「スピリチュアリティ」は、〈超越性と主体との関係を問いつ直す回路ないしは装置〉として捉えられるのであり、こうした「装置」への歴史的・理論的検証を通して、他者との新たな関係性を踏まえた共同性を問いつ直すことが可能となるのである。

このような研究状況を踏まえ、本特集では文学や映像を中心とする表象文化に焦点を定めて議論を行う。具体的には、戦後の「スピリチュアリティ」の社会的文脈の系譜を考察したうえで、各時代の表象文化やその展開の条件となる社会的な基盤を問いつ直し、三・一一以後の文化状況に於ける他者との新たな関係性の模索をなすものである。

加島正浩論文は、荒俣宏『帝都物語』（一九八五―一九八九）を取り上げ「東京」と「ユートピア」の二語をキーワードに「東京」と「ユートピア」が八〇年代のキーワードになっていることを確認し、東京を駆動させる現行のシステムとは異なるあり方を「ユートピア」という形で模索したテキストとして『帝都物語』を評価する。そのうえで、東日本大震災直後の放射能への恐怖で混乱する東京やヘイトスピーチなどが蔓延する排他的な雰囲気や、『帝都物語』を踏まえ劇画化した京極夏彦『虚実妖怪百物語』を分析し、『帝都物語』が示したオカルトを駆使しながら別の東京のあり方を示す方法が東日本大震災以後どのように参照されているのかを考察している。

木下幸太論文は『モスラ』（本多猪四郎監督、一九六一）を取り

上げる。七〇年代には「異界」や「オルタナティブ」、「癒し」として活用される「スピリチュアリティ」が、「救済」や「神」という要素と近いものと考えられた六〇年代においてどのように活用・表象されるのか、『モスラ』を一例として解釈する。木下論文では主に二つの考察が行われる。①まず、映画の中心的存在である怪物モスラがどのようにスピリチュアリティと併せて表象されるのか。②モスラを中心軸として描かれるインフアント島という（南島）表象。この二つの表象を分析し、『モスラ』の一九六一年公開当時の批評性を問う。

泉谷瞬論文は、津村記久子『サイガサマのウィックカーマン』（二〇一二）を取り上げる。本作は大阪府南部の架空の町で住民たちから信仰を受ける「サイガサマ」の祭りをめぐる物語であるが、リズムに基づく日常が描かれる中で、そうした世界観では捉えきれない奇妙な現象がいくつか提示される点の一つの特徴がある。泉谷論文は、現代日本社会において隆盛を見せる「スピリチュアリティ」概念と本作品を対比させながら、「家族」に代表される既存の親密性とは異なる関係性を見出す試みとして本作品を解読することにも、本作品には東日本大震災<sup>（注）</sup>以後の刻印が僅かに含まれていることを指摘し、そうした同時代状況において本作品が示す可能性についても論じる。

柳瀬善治論文は、三者の論考を受け、それぞれのポイントを「怨霊の鎮魂とシステムの改編」（加島）「暴力批判論」（木下）「弱さと関係性」（泉谷）とみなしたうえで、田中純の原爆写真論（アドルノの「バラタクシス」）、市野川容孝の「ベンヤミン」『暴力批判論』研究（「脱措定」＝「解放」としてのEntsetzung<sup>（注）</sup>）、四方田犬彦のテロリズム

映画論（ベンヤミン『パサージュ論』の「哀悼的想起」、田崎英明のベンヤミン解釈（『無能なものたちの共同体』を理論的補助線として考察し、三者の論文が提出する視座を「三・一一以後のポストベンヤミン的星座」記号配置」として提出する。

こうした視座から原爆・原発表象を検討する試みはすでに柿木伸之『パット剥ギトツテシマッタ後の世界へ ヒロシマを想起する思考』（二〇一五）に優れた達成があるが、本特集は、この柿木＝ベンヤミンの視座が、戦後日本の「スピリチュアリティ」表象の変遷の考察だけでなく、三・一一以後の新たな鎮魂空間や社会的関係の再構築にすら射程を伸ばす理論的可能性を持つことを示すものであるといえる。

本特集が扱う時代（一九六〇―二〇一〇年代）は、数度にわたる原爆文学論争との並行性や戦後の批評理論史の動向、新宗教・新霊性文化の勃興とその政治化の過程、サブカルチャー・テクノロジーと文学の接点（荒俣の仕事がその典型となる）など現在へもつながらる様々な問題を内包しており、その問い直し自体が原爆・原発表象への新たな研究のヒントに満ちたものである。

この特集が、さらなる研究の展開へのアシストとなることを強く願う。